# 「私のロータリー」

土屋 亮平

松戸ロータリークラブ

　そもそもロータリーは学問ではありません。因って、何かを学ぶと言うものでは無いはずです。私達社会人が、社会生活、実業生活に於いて「どうなるべきか? どう生きるべきか?」と言う生き方を、それぞれの立場なりに会得すると言う、即ち、『人生道場』と捉えるべきことではないでしょうか?

ロータリアンの一人一人は日常生活・社会生活において、生き方も暮らし方もそれぞれであるからでしょう。
ロータリークラブも同様で在りましょう。クラブを構成しています会員により、ロータリーの提え方は勿論のこと、宗教観・価値観も多様性に富んでいる筈です。
その様なクラブこそ、寧ろバランスが採れた、安定性に優れたクラブと言えるのではないでしょうか。
ロータリーの創設者・ポール・ハリスも、この様に回顧して居るでは在りませんか。

『一種類の花、一つ色ばかりの花壇に、何の面白さがありましょうか?
色々あってこそ、人生に薬味がきくと言うものです』と。

　かつての良き時代のロータリーは、原則的に 1 つの職業から、1 名づつの会員を選ぶ、即ち 1 業種 1 会員制を採用して居りました。それぞれ違った職業から 1 名づつの会員を選ぶ良さは、花壇を彩る鮮やかさと同様に、ロータリーの多様性を遺憾なく発揮し、各ロータリアンがそれぞれのロータリー観をもつことに依って、自信をもって自己の職業の存在意義を自覚し、世界的に急速に発展を遂げた大きな要因に成ったのではないでしょうか?
それは職業ばかりではありません。

　この様に 1 業種 1 会員制の原則を堅持し、且つ人種・宗教・国境・社会的地位等を問題としなかった事が、無造作に拡大を続けたこと、この多様性がロータリー発展の最大の要因であったと、言えるのではないでしょうか?
これから演題の『私のロータリー』は、何故、「私のロータリー観が形成され、それを維持して来られたのか」お話しさせて頂き、任を解かさせて頂きます。

今から 70 年前、第 2 次世界大戦で国際ロータリーを脱退して居りました日本のロータリーは、1949(昭和 24)年、東京・京都・大阪・名古屋・神戸・福岡・札幌の 7 クラブが国際ロータリー第 60 地区として復帰が認められました。
其れより 7 年後、 1956 年 11 月 14 日千葉、市川ロータリークラブをスポンサーとして千葉県で 7 番目のクラブとして松戸ロータリークラブが誕生致しました。
私が松戸ロータリークラブに入会を認められましたのはクラブ創立 7 年目、1963 年 7 月、以来 57 年目に成ります。

入会以来、無我夢中のロータリーライフであり、『ロータリーの綱領』を信じ、職業倫理の遂行一筋に 57 年間、過ごすことが出来たことは、私にとって誠に幸運と言う外ありません。

〔話題が横道に逸れます〕
1973 年・ノーベル生理学・医学賞の受賞者コンラート・ローレンツ博士(オーストリア)は「アヒルの卵をガチョウに孵化させたところ、ヒナはガチョウを親鳥と思い込んで、後を追いかけ回した。即ち、具体的に生まれた直後、眼の前にあって動いて、声を出すものを親だと思い込んで仕舞う『刷り込み(imprinting)』を発表しました」
正に、この『刷り込み現象』が公式訪問時、神守源一郎パスト・ガバナーに因って、私は刷り込まれたのではないかと思える節をお話致します。
当時のガバナーの方々と申しますと『竹田宮様』、『松方元男爵』、『神守源一郎元満州鉄道副総裁』と近寄り難き、錚々たる方々でありました。

〔注釈〕
満鉄とは、日露戦争の勝利で東清鉄道支線を獲得し、1906 年から第 2 次世界対戦中存続し、日本軍による満州経営の中核を成しておりました。
特に、満鉄調査部(後藤新平創設)のシンクタンクとして現在の財務省に匹敵するエリート集団でありました。当時、日本の総理大臣に成るよりも、満鉄の総裁に成りたいと言うほど魅力的な地位であったようです。

私の新入会員当時の日本のロータリーの状況はと申しますと、国際ロータリーに復帰した 1949 年の当時、火力発電に代わって国産の原子炉第 1 号が点火され、比れからは原子力の時代の到来ともてはやされ、経済の進展に呼応して日本のロータリーの拡大も目まぐるしく、拡大に拡大を繰り返して居りました。

私がロータリーに入会したのは、国際ロータリーに復帰して 13 年目。短期間にも関わらず、その拡大のスピードは目ざましく急速な発展を遂げ、既に 8 地区に及び 519 クラブを教え、世界第 3 位の規模を誇るまでに急成長しておりました。

当時の国際ロータリー第 358 地区は、関東の 1 都、6 県に新潟を加えた広大な地区で、ロータリークラブの数は既に 90 クラブを教え、ガバナーの公式訪問には、 1 年間を要したと聞いて居ります。
この連日の様に各地で創立総会、所謂チャーターナイトが開催され手分けをして、お祝いに駆けつける有り様でした。

私が松戸ロータリークラブに入会して以来 57 年『ロータリーの綱領』を信じ、ロータリーライフを一途に過ごすことが出来ましたことは、何と奇跡と云う外ありません。
思い直せば私にとって適切なる指導者、否、心底信頼に値する先導者・良き人生の先達に巡り会えたからこそと、ロータリーの存在に心底感謝して居る次第で在ります。

其の 1。
ロータリアンになって、最も尊敬・信頼出来る指導者に巡り会えたことは、生涯を通して誠に幸運で在りました。『ロータリーの神髄』をご教示賜り、私の人生の全てを決定付けて頂いた事に、終生感謝を続けて居ります。
正にローレンツ博士の『刷り込み(Imprinting)』現象が、私に刷り込まれたのです。
私が松戸ローリークラブに入会して 2 年目・1964(昭和 39)年、国際ロータリー第 358 地区のガバナーは神守源一郎様(東京東ロータリークラブ)でした。
公式訪問の知識など勿論のこと、ロータリーの理解など程遠く、緊張だけが異常に高ぶっていたことは、今でも鮮明に覚えて居ります。
長老の親睦委員長から新会員が公式訪問時、ガバナー接待が任務であると指示されました。
当日私は、ガバナーはおろか公式訪問等見当もつかぬ儘に、親睦委員長の指示の下『親睦委員会』のタスキを掛け 12 月の小雪がちらつく玄関で、今や遅しと待ち構え居りますと黒塗りの車が到着。金縁の眼鏡を掛けられた神守ガバナーを恐る恐る応接室に、ご案内。
やれやれと思いきや、お茶をお出ししろとの付録付き、新入会員の悲哀をいやと言う程、痛感した次第でありました。
緊張で無我夢中の公式訪問では在りましたが、『ガバナーの特別講演』の神守ガバナーのご教示が素敵でした。稀に見る説得力。十二分に得心し。手応えを感じましたのは、私ばかりでは在りますまい。

教えの第 1、『ロータリーの綱領』

綱領とは、ロータリーにとって最も大切なところ。

綱領の「綱」は『網アミ』締める丈夫な太い『綱ツナ』を指します。勿論、このツナは強靭でシッカリして居なければなりません。

次に、綱領の「領」の偏の『令』はスッキリとした清らかな御告げを意味します。

一方、旁の『頁』は腰や首筋と言った、人間に執って最も重要なところを指します。

これらを締めくくって綱領の真意は、人間に執って最も重要で大切な部分を指すことから転じて「物事の最も重要なところ」と示唆されました。

理論的な解説の次ぎに、ロータリーの綱領に就いて、次の様に注釈を加えられました。

「要するに『ロータリーの綱領』とは、ロータリーにとって最も重要な部分を、シッカリと締めくくる大綱である」と綱領を説かれ、公式訪問の特別講演をなさいました。

後半のクラブ協議会で神守ガバナーは、次ぎの様に職業奉仕委員長の発言に対し、見事な補足解説されました。

正に『目から鱗』―――神守ガバナーは一言『職業奉仕とは一言・商売繁盛の秘訣』―――

第 1 に、一生懸命お客様に尽くすよう、専念しなさい。必ず、成功します。

此れが職業奉仕の全てです。

（貴方がたは舞台の上の役者です、舞台の上で如何にお客様と一体になれるか。その成果がオヒネリ、つまり収益なのです。お客様の感動による感謝の現れが収入であると心得なさい）

第 2 に、社員に、この気概を職場に広めることが、必ず社員自身に還元されると言うことを悟らせなさい。

第 3 に、この精神を同業者は勿論、異業者の世界にも広めることが、社会の改善に繋がり、住み良い社会の創造に繋がるのだと悟らせなさい。

此れがロータリアンの責務であます。

言い換えれば、自己の職業に誇りを持つこと。

愛情を持つこと。

責任を持つこと。

これが職業奉仕の全てですと仰られました。

『つまり、お客様にどれだけ、感動して頂けるか、どうかに尽きます。

此れぞ、ロータリーの職業奉仕の全てです』

当時から職業奉仕とは「職業を通じて社会に奉仕する」と解説され、難解だ、難解だと云われていた職業奉仕を、実践から得られた体験を通じて『簡にして妙』職業奉仕をいともたやすく取り組める様に、ご指導下さった

国際ロータリー第 358 地区ガバナー神守源一郎様

に終生感謝をしている次第で在ります。

それ以来、私の「ロータリーの根本原理」は職業奉仕の実践在るのみと信じ「如何に商売繁盛への努力を積み重ねられるか。その結果は、お客様にどれだけ喜んで頂けるかが全てである」と信じ、自信をもって実験し続けて居ります。

この職業に就いて、経営学者ピーター・ドラッカー(1900～2005 年)は職業に就いて「社会のニーズに従って存在出来るのが職業である」と定義付けて居ります。

その職業も時代と共に変遷し、社会性を伴ってこそ、職業としてこの世に存在出来るのであると、看破しております。特に経営者に対し、

経営者は真摯で且つ、誠実であり、謙虚であれ、

経営者は本業を通じて、社会の有用な存在となれ。

と名言を残されて居ります。

先刻、神守パストガバナーが『綱領』の原語的解説をなさったお話を致しましたが、近年『綱領』を『目的』と分かり安く、言い換えると言う言葉遊びが、流行して居るのではないかと思えてなりません。『綱領』と『目的』とでは比較出来ない程、次元の異なる世界であることを論じ得ないで。

『綱領』と『目的』に付きまして、平成 13 年 12 月号の『ロータリーの友』に、当時 RI 日本事務局財団室長片岡咲子氏「ロータリーの網領」について第 3 条が目的(purpose)で第 4 条が Object(網領)ですから、目的は使えないと考えます。「手続要覧」を読みますと、ロータリーの原則(Principle)は,「職業分類」と「ロータリーの網領」ということになると思います。

ですから Object の方が purpose より重い意味があると考えられます。Object そのものは、目標とか目的くらいの意味でも Object of Rotary は特別の意味があると考えます。

英文学者・故入江直祐先生は綱領は大変良い訳で、直すなら、むしろ、綱領に当たる英語の Object をカルタ(Charta)に変えるべきだ、とおっしゃいました。マグナカルタのカルタです。

又、平成 23 年 2 月号「ロータリーの友」27 頁にガバナー協議会・綱領等翻訳問題調査研究小委員会の記事に、些か腑に落ちない箇所がありますが、どの様に判断すべきか?

『設問 1-4 では、現在の「綱領」の修正に手をつけるかどうかを問うている。

修正の必要がないと回答された方が 17.5 パーセント、多少問題があってもこのままで継承したいという方が 34.7 パーセント、定款はロータリーの要の文章だから、よくわかるように修正すべきだとの方が 47.5 パーセントであった、このように、修正派は非修正派の約 3 倍ほどだが、3 分 1 のロータリアンは、問題ありとは思うがこのままでと回答している。これからの意見調整が求められている課題が、ここに浮き彫りにされている。
日本語の常識的に判断ですと、
修正の必要はないと回答された方が 17.5 パーセント。
多少問題あっても、このままで継承した方がよいと言う方が 34.7 パーセント。
合計 52.2 パーセント
よく分かるように修正すべきだの方が 47.5 パーセント
(17.5 パーセント+34.7 パーセント) 対 47.5 パーセント
正常なる判断と思いますが如何なものか?
　親友の名誉の為に、記して置きます。
網領等翻訳問題調査研究小委員会の委員をお勤めの国際ロータリー第 2760 地区・片山主水パストガバナー(名古屋東南ロータリークラブ)は『現行の日本語訳はなかなかよくできており、ロータリーを何十年もやっていると今の綱領が身に染み付いている。身に染み付いたものは変えずに残しておいた方がよいではないか』と誠に穏やかに仰っておられます。
　振り返れば、日本のロータリーの指導層を自認している人達は、従来のものを換えることに優越を感ずるのか、換えることに汲々としているかに見えて成りません。
優れた先輩の皆さんが英知を絞り、『綱領』と言う語句に含んだ深遠なる真意を弊履の如く破り捨て、安易で世俗的な『目的』に換えられて仕舞いました。
　偶然にも、私がノミニーの国際ロータリー第 2790 地区 1987 年度の地区協議会の席上で『換えては、ならないもの。換えなければ、ならないもの』のお話を致しました。

京都に一燈園と言う托鉢を行う宗教団体があります。その団体の講師・石川洋氏の講演を拝聴致しました。
演題は『西陣織り』を題材とした正に『換えては、ならないもの。換えなければ、ならないもの。』でありました。
講演の内容はと申しますと「世の中には、換えなければ、ならないもの。換えては、ならないもの」が在ります。
『西陣織り』に例えますと、織物には縦糸と横糸があります。縦糸と云うものは、無地であり、強靭であり、この縦糸の強靭さは普段は外からは見る事は出来ません。又見える様であっては布地はボロボロで役立ちません。

其れに対し、横糸は美しく彩られて居り、その上その時代・時代に即応して、限り無く艶やかであり、華やかでなければなりません。しかし、このきらびやかさや、美しさも、外見からでは見ることが出来ない強靭な縦糸と言う裏付けがあってこそ映えるのです」と述べられました。

この『縦糸と横糸』の話を引用致しまして、

『ロータリーには縦糸と横糸が存在します』

ロータリーに於ける縦糸とは、『綱領』即ち『ロータリーの理念』であります。
理念には確固たる鉄をも貫く『理念の強靭さ』が必要であり、個々の会員が誇りを以て心にシッカリと秘め、積極的に実践することが重要で在ります。
此れに対しロータリーの横糸とは『諸々の奉仕の手法』であります。いつの時代にも即応する華やかであり、艶やかでなければなりませんと説いたので在ります。

当時、あれ程に強く訴えた横糸であるべき各クラブ独特の奉仕は、その個性的艶やかさは薄れて来て居ないでしょうか?
国際ロータリー上層部により作成された画一的に割り当てられた奉仕一色に甘んじていないでしょうか?
強靭であるべき筈の、目的(綱領)が蔑ろにされ、縦糸の使命も心細くなって来て居ることを、危倶せずには居られません。
綱領が難解であると言われる箇所は、率直に言って『奉仕の理想』で在りましょう。
『奉仕の理想』を『奉仕の理念』と言い換えたからと言って、判り易くなったと言えるでしょうか、疑問が残ります。

私は『奉仕の理想』の理解を 1964～65 年第 359 地区ガバナーをお務めになられた笹部誠パストガバナーが仰った『Ideal of service』の本意は『奉仕の気持ち』であります」と述べられて居られます。
そこで私は『奉仕の理想(Ideal of Service)』とは、「相手の立場になって思い遣り、相手の立場になって行動する」即ち、『思い遣りの心』と理解するに至って居ります。
其の 2、

2 回目の幸運な出会いはロータリーを通じ、人生の師匠に巡り遇えた事です。
以前、取り引き銀行の支店長から「当行の取引先の社長が、面白い記事を投稿して居ますよ」と言って『カレント』と言う雑誌を頂きました。
投稿者は偶然にも 1983～84 年度・国際ロータリー第 2790 地区大会で演題「やさしいロータリーの話」をなさった国際ロータリー第 2580 地区佐藤千寿パストガバナーでした。
3 年間に渡り、経済評論『山色水声』を『カレント』に投稿を続けられました。その『山色水声』を編纂され直され、新たに上梓なさいました。

時正にバブル崩壊の兆しが顕著に現れ出した折りも折り、数々の警告を発し続けられて居りました。

「儲かるとは、損をする人が居るから、儲かるのである。即ち、儲ける人と損をする人が居てバランスが採れるのである。其れが皆が儲かっていると言うことは、皆が損をしていると解すべきだ」と毎日の様に「バブル崩壊」に警告され続けて居られました。

そもそも『山色水声』の投稿の由来はと申しますと「中国・古典の四書五経の中には、中国 4 千年の史実は言うに及ばず、森羅万象・世の中の全ての事が網羅されて居るはず。
お負けに四書五経中には、それらの起承・転結が克明に、記録されて居るではないか。
その結論をどう捕らえ、どう生かすかは、その人その人の技量に困る。無理強いはせぬ。
この忠告も、転ばぬ先の杖とでも言うべきものでは無かろうか」と記述されて居られました。

正に時を得た『山色水声』発刊に対しまして、1990 年日本新聞記者クラブから特別功労賞を受賞なさいました。

その返礼の会を催した折り、その主催を命ぜざれ、全力を尽くしたことは言うまでもありません。
それ以来、昵懇にして頂き、人生の歩み方、仕事への取り組み方、会社経営のあり方とあらゆる面で、ご教授を頂き、正に人生の『師』でありました。

佐藤千寿様は一人のロータリアンの立場から、一職業人として自己の職業観を次ぎの様に捕らえられ、諭されました。
「職業と言うものには人格がありません、敢えて人格を付けるとしたら、その企業の経営者に外なりません。経営者自身が己の人格を正しくすると言うことは、つまりは企業経営の姿勢を正すことであります」

具体的に言えば、自己の仕事に取り組む姿勢は「ロータリー精神を貫くこと」即ち、「思い遣りの心を更に高め、昇華(アウフヘーベン)させ、世の中に道徳心を広めていくこと」に外なりません。晩年、よく色紙に『大道無難』と書かれ、人生と言うものは遠回りでも、『王道』の真ん中を堂々と歩むのが、一番の近道であると注釈を付けられて居りました。

----------〔電電公社のハンダ入札事件〕----------
即ち、企業人が正々堂々と王道を貫いたご褒美が、各企業の繁栄に繋がる図式である、常々、企業人の生きるべき道を示され、同様ロータリアンとしての生きるべき道も「ロータリーがどの様に変わろうと、

『初心忘るべからず』初心、即ち「ロータリーの綱領」を蔑ろにしない限りロータリーは永遠に不滅だ」と願うように常々仰られました。

其の 3、

3 度目の幸運なる出会いは『奉仕の理想(Ideal of Service)』の裏付けを得たことでした。
ロータリーに入会して 26 年目、1988 年 7 月 1 日、国際ロータリー第 2790 地区ガバナーを勤める初日の事であります。
当時は新ガバナーを激励する会が、毎年東京プリンス・ホテルで開催されて居りました。
当時は元理事がロータリーに関する講演をされるのが慣例でありました。

当日のガバナー会での講演者は、韓国の CKO 元理事でした。
講演の最後に、一つの詩を朗読されたのです。

人が生きると云う事

人が生きると云う事は
誰かに借りを作る事
その借りを返していく事
誰かにして貰った様に
誰かにしてあげる事
人が生きると云う事は
誰かと手を繋ぐ事
その手の温もりを忘れないで行く事
巡り合い、愛し合い別れた後に
悔やまない様
今日、明日を生きよう
人は一人で生きて行けない
人は一人で歩んで行けない。

この詩は、近年亡くなった永　六輔氏の詩と聴きました。　―〔作詩者、永　六輔氏〕―

私はガバナー就任時『ロータリーの綱領』の中の『奉仕の理想』を「相手の立場に立って思い遣り、相手の立場になって行動する」と漠然としか捕らえられませんでした。

この『人が生きると言う事』と言う詩が『奉仕の理想(Ideal of Service)』の解釈を決定付けました。
即ち、『奉仕の理想』を『情けは人の為成らず』と決定付けた次第です。
因って、公式訪問時に全てのクラブで『人が生きると言う事』を朗読した次第です。

以上、三題話を申し述べましたが、要するに。

1）職業奉仕とは、各ロータリアンが自己の職業の繁栄を願い努力し、真剣に励む。
其れを世間に広めることにより、住みよい社会を創造すること。

2）ロータリアンとして、常に正々堂々と王道を歩み続けること。そして、初心を貫くことが、全てに優ると悟り、実践すること。

3）『人は一人で生きて行けない』他人と助け合って生きていく外はないと悟るべきである。

と言うのが、私とロータリーとの出会いであり、
私がロータリーと取り組む姿勢であり、
私がロータリーを説く主張なのであります。

そのロータリーが説く職業奉仕こそがロータリーの金看板であり、ロータリー独特の主義主張なのであります。
私達のロータリーの根本原理は何であったか、今一度問い正す必要は急務であります。

私の人生の師匠でありました第 2580 地区パストガバナー故佐藤千寿様はよく仰って居た『原点に還れ』であります。この『原点に還れ』とは単純にロータリー発祥当時の姿に戻れと言う単純なものではありません。真の主張は『初心忘れるべからず』幼児の描いた絵は幼稚であっても純粋で、誰が見ても判りやすいものです。
其れが大人になるに従い複雑怪奇な、技巧が多く訳の分からぬ絵になるのは何故でしょうか。
即ち、創業当時の素直で、純粋であった初心を思い起こせと言う叱咤であります。

ロータリーとて、創業時の初心は幼児の如く素直な眼でものを見ることが出来、単純明快であり、純粋な心で判断できると言う極めて単純で、易しいものであった筈です。
其れが、私に採って 58 年間のロータリー生活を支え続けて来られた理由で在ります。

只今、お話致しました三題議は、私のロータリーの考え方の構築された過程であり、私のロータリーの思想形成の回想でありました。
ロータリーへの取り組み方、実践の手法、ロータリーの精神的方向性は偉大なる先輩に触発されて構築されたお話を致しました。

これから申し上げますことは、若いロータリアンの皆様方へ、絶大なる期待を込めてのお願いと言いますか、寧ろ、遺言であります。

どうぞ、年寄りの『独り言』とご容赦頂きまして、心の片隅に留め頂けますれば、幸いでございます。

常に身近く在り過ぎ、見落としがちで在りますが、毎月号の『ロータリーの友』誌の 6 ページをご覧下さい。「ロータリーの誕生とその成長」と言う記事が掲載され、次の様にロータリーの変遷、根本原理を易しく正確に記述されて居ります。

「20 世紀初頭のシカゴの街は、著しい社会経済の発展の陰で、商業道徳の欠如が目につくようになっていました。
ちょうどその頃、ここに事務所を構えていた青年弁護士ポール・ハリスはこの風潮に堪えかね、友人 3 人と語らって、お互いに信頼のできる公平な取引をし、仕事上の付き会いがそのまま親友関係に発展するような仲間を増やしたい、という趣旨でロータリークラブという会合を考えました。こうして 1905 年 2 月 23 日にシカゴロータリークラブが誕生しました。

それからは、志を同じくするクラブが、次々各地に生まれて、国境を超え、今では 200 以上の国と地域に広がり、クラブ数 35893、会員総数 1196211 人、地区教 525 地区(2019 年 7 月 12 日 RI 公式法発表)に達しています。
そして、これら世界中のクラブの連合体を国際ロータリーと称します。

このように、歴史的に見ても、ロータリーとは職業倫理を重んずる実業人、専門職業人の集まりなのです。
その組織が地球の隅々にまで拡大するにつれて、ロータリーは世界に眼を関いて、幅広い奉仕活動を求められるようになり、現在は多方面にわたって多大の貢献をしています」と明記されて居ります。

斯くの如く、単純明快な論理で構成されていた結果が沢出の人から支持を受けました。
その結果が、驚異的発展が成されたものである事を確信、忘れてはなりません。
しからば、われわれ全てのロータリアンは『初心に還れ』に追従し、ロータリーとは職業倫理を重んずる実業人、専門職業人の集まりであると今一度原点に戻り、綱領を再確認致しましょう。
ロータリークラブの最大の特質は実業人、職業人の組織であり、職業人としての誇り、会員相互の親睦など再確認すべきであります。これらの理論的根拠は何処にありやと問われるならば、『手続き要覧』の第 1 部ロータリーの使命の遂行・1 基本理念・「社会奉仕に関する 1923 年の声明」にありと明言致します。

そもそも、この声明文の発端の由来は、今から約 100 年前に逆上ります。
シカゴ・ロークリークラブの第 2 代目・ミード会長が地域社会への奉仕を強調した結果、『身体障害児・救済運動』に端を発し、全く慈善団体と変わらぬクラブが出現した結果、行動派と理論派間で大論争が発展してしまいました。
国際ロータリーが抱えた創立以来の最大の論争であり、ロータリー分裂はおろか、存亡の危機まで危ぶまれるに至って仕舞いました。
其処で、ポール・ハリスは「次年度 1923 年のセントルイス大会に於いて、この『身体障害者養護学校』の設置運動が、どの様な枠組みで実施されたならロータリーの理論派の理論と合致出来るか、結論づけましょう」と提案しました。

1923 年セントルイス大会決議『社会奉仕に関する第 34 号議案』が、大会決議委員長ナッシュヴィル・ロータリークラブ会長・ウィル・メイヤーの下に提出されました。
その内容はと申しますと、

何故、ロータリーを必要とするか?
クラブの奉仕活動は完全に自主・独立性を有するもの。
他のロータリークラブに干渉してはならない。
他のロータリークラブの実験例を軽視、無視してはならない。

審議の結果、見事に「理論派、行動派双方の主張を巧みに噛み合わせ、初期ロータリーの試行錯誤の総決算」を果たせたのであります。

半世紀の時は過ぎ、
突然、1984～85 年度のカルロス・カンセコ RI 会長が『ポリオ撲滅プログラム』の発表、此れを期に『社会奉仕に関する第 34 号議案』が奇遇な運命を辿り出したのです。

2007 年 11 月の RI 理事会で、フタ事務総長とマクガバン元 RI 副会長の連名で、『社会奉仕に関する第 34 号議案』がポリオ撲滅運動の障害になるとし、削除を RI 理事会に要請しました。
偉大なる先人達が、英知を絞りロータリー存亡の危機を救った、輝く金地塔の『社会奉仕に関する第 34 号議案』が 60 年ぶりに、叩き起こされ、
2008 年 1 月の理事会で、『社会奉仕に関する第 34 号議案』は、最早、社会奉仕の理念並びに、RI とそのクラブの原理を正確に記するものではないと判断する。
『ロータリー章典』並びに『手続要覧』から削除するよう事務総長に要請する。
『ポリオ撲滅の障害』になると高言、紆余曲折の末に、風前の灯火の下に晒されました。

其れが、どうした事か?

2010年1月の理事会に、ビチャイ・ラタクル元RI会長より『社会奉仕に関する第34号議案』がその重要性の観点から、今後の『ロータリー章典』・『手続要覧』に掲載する事が提案・決定されました。

2010年6月の理事会で『社会奉仕に関する第34号議案』を今後の『ロータリー章典』・『手続要覧』に含むこと。その声明文に反対する如何なる見解も、もはやロータリーの原理として受理しないこと。続けて、その声明文を歴史的として言及する文は、その声明文の価値を失わせる可能性があると指摘した。

因って、理事会はその言葉、即ち、歴史的として言及するを取り除き、全文を章典に復活させることを推奨した。

ビチャイ・ラタクル元 RI 会長の登場により『社会奉仕に関する第 34 号議案』の存在価値が明確に決定付けられ『社会奉仕に関する第 34 号議案』の存続に順風が吹き始めたかに思われますが? 何か起こったのか、私の程度では理解し兼ねます。

その後、起こった現象は、フタ RI 事務総長が退任し、後任にフューコ事務総長が就任しました。

正に、『社会奉仕に関する第34号議案』の存続に順風が吹き始めたかに思われますが、不安は拭いきれません。

まして、ビチャイ・ラタクル元RI会長は1926年のお生まれです。

現況のRIの勢力分布と申しますと、言わずと知れた絶対的行動派の世界であります。

ましてや、当時と比べて理論派と行動派の力量の差は言わずもがな。

組織の分裂につながる程のエネルギーは、ロータリーには最早期待出来ますまい。言わずと知れた多数決の原理で、結論は明白で在ります。

ピグマン元RI事務総長が『ポリオに打ち勝つ』で、『決議23～34号議案』がポリオ撲滅運動の障害になると採り上げ、その声明の削除を要請した理由を『社会奉仕に関す 34 議案』の中から拾ってみますと、

第3パラグラフ　国際ロータリーの使命は有益なる助言を与える情報交換所に過ぎない

第4パラグラフ　クラブ単位の奉仕は毎年の会計年度で完了するもの

第5パラグラフ　クラブは絶対的自主権を有する

国際ロータリーと言えども、何か命じたり、禁じたりしては成らない

第6パラグラフ　他の機関が実施中のものは重複は避けるべきである

活動はロータリアン個人が主体で、団体奉仕は奉仕の訓練する実験である

1984 年度版・手続き要覧から『社会奉仕に関する第 34 号議案』が削除された当時、RI 上層部の人達は、自分達自身が奉仕活動の実施主体になろうとする強い願望が、芽生えたのでは無いだろうかと、疑う余地は十分に在ります。

この声明文がポリオ撲滅運動の障害になる、最早社会奉仕の理念、国際ロータリーとそのクラブの原理を正確に記するものではないと判断する等、枚挙に暇が在りません。

諸子百家の一人・荘子に『忘栓』と言う言葉があります。「魚ヲ得テ栓ヲ忘レル」目的を達して仕舞うと、その為に尽くして呉れたものの恩を、蔑ろにして仕舞う譬えで在ります。
恩を忘れたばかりでなく、仇で返すとは、正に人の道に反すると、言うべきで在りましょう。

いずれにせよ、『社会奉仕に関する第 34 号議案』の重要性を再認識する事が、ロータリーの未来を予測し、此れからのロータリーの歴史を刻んで行ける唯一の道と信じます。
その根幹に在る初期ロータリーに於ける、他に類を見ない特質である『深遠なる哲理』と『輝かしい実践の金字塔』の真価が問われるのではないでしょうか。

今、正に第 2 回目のロータリーの存亡の危機にあると自覚し、その打開策として、全ロータリアンが『ロータリーの初心』に立ち返ることです。
初期ロータリアンの如く、純粋で、誠実さに満ち溢れ「職業倫理の高揚を図ることが、自ずと自己に還元されることを信じ、職業倫理の向上に責任と誇りを以て励むこと。

定款・細則等の諸規定単純化に務め、『奉仕は親睦より生まれ、奉仕は親睦により磨かれる』に立ち返ること。

そして、われわれの責務は、『先人達が築いて呉れた、ロータリーの精神と、その哲理を次世代に継承させる』にあると信じて止みません。　　ご静聴感謝致します。